Ⅱ．分担研究報告書

研究3-4　小規模医療機関等における特定行為研修を修了者の活動に関するスコーピングレビュー

研究代表者　酒井　郁子　（千葉大学　教授）
研究協力者　佐伯　昌俊　（千葉大学　助教）
研究協力者　後藤　智美　（千葉大学　特任研究員）

研究要旨
日本における特定行為研修修了者（以下、修了者）・専門看護師、診療看護師等の研究動向と、在宅領域における修了者の実践の特徴を明らかにするため、スコーピングレビューを実施した。データベースから抽出した566件をスクリーニングし、最終的に173件を対象とした。全173件の文献のうち、修了者に関する文献は34件であり、さらに在宅領域での実証研究はわずか5件と極めて限定的であった。5件の分析の結果、修了者の実践の特徴として、【日常生活を阻害しない個別の文脈に沿った定期的な処置の最適化】、【身体的・心理的苦痛を最小限に抑える処置方法の選択】、【医学的妥当性の担保に基づく介護者の能力と生活実態に即した代替ケアの設計】、【尊厳保持と病状変化への対応を両立させる臨床判断】、【重症化を防ぎ迅速な治療的介入を導く医師との主体的な連携】、【全身状態と療養環境の総合的評価に基づく包括的なリスクマネジメント】、【多職種に対する教育的支援を伴うケアの標準化】の7つのカテゴリが抽出された。これにより、修了者は高度な臨床推論と生活の文脈を踏まえた包括的な特定行為の実践をしていることが示された。

A. 研究目的

本研究は、以下の2つを目的とする。
1. 日本における特定行為研修を修了した看護師、診療看護師（NP）および専門看護師に関する研究の全体像を明らかにすること
2. 在宅領域における特定行為研修を修了した看護師に求められる実践の特徴を明らかにすること

B. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究では、これまでに報告された修了者、診療看護師（ナースプラクティショナー）、専門看護師に関する研究の範囲や頻度を明らかにするため、スコーピングレビューの手法を用いた（Arksey & O’Malley, 2005）。本研究は, the PRISMA extension for scoping reviewsに準じて報告した（Tricco et al., 2018）。なおレビュープロトコルの登録はない。

2. 組み入れ基準

本研究では、PEPPAモデルを参考にSaikiらが作成した修了者の活用に関する「構想」「育成」「配置」「実装」「普及・定着」のプロセス（Saiki et al., 2025）に基づいて、検索キーワードを設定した（表1）。

包含基準として以下の5つをすべて満たす文献を組み入れた。

1) タイトル、抄録、キーワードに、当該人材を示す用語（特定行為研修、特定看護師、診療看護師、ナースプラクティショナー、専門看護師、advanced practice nurse、clinical nurse specialist 等）を含む文献
2) 当該人材の活動の構想、育成、配置、実践、実装、普及・定着に関する内容が報告されている文献
3) 研究対象または研究の実施背景が日本である文献
4) 原著論文、総説、解説、実践報告として報告された文献
5) 日本語または英語で記載された文献

除外基準として以下に該当する文献を除外した。

1) 重複した文献
2) 当該人材の実践内容・制度に関する言及が不明確な文献
3) 海外での活動に焦点を当てた文献
4) 学会抄録、文献レビュー、意見論文、書評、会議録、商業誌の特集記事（座談会を含む）

検索により該当した文献のタイトルと抄録、本文の内容が選定基準を満たすかを確認し、対象文献を選定した。なお本レビューでは、専門看護師と認定看護師を区別せずに「高度実践的役割を担う看護師」として扱っている文献については、雇用目的、配置、役割期待、組織的活用に関する記述を把握する目的に限り包含した。一方、両者の制度的差異や専門性の比較を主目的とする文献は、本研究の目的に合致しないため除外した。

3. 文献検索の方法

2021年から2025 年の期間を対象に和文誌は医中誌Web版ver.5（以下、医中誌）、国際誌はPubMed、CINAHL、MEDLINEを用いて文献検索を実施した。各データベースの収載文献の特性および索引語の違いを考慮し、検索式はデータベースごとに調整した。医中誌では日本の制度・資格名称に加え、対象者の役割や活動に関連する日本語検索語を用いた。一方、PubMed、CINAHL、MEDLINEでは、国際的に用いられている英語の職種名称および“Japan” を用いた簡略化した検索式を採用した。

4. 分析方法

まずスコーピングレビューの結果として、対象となったすべての文献について、文献の種類、保有資格、活動の場や領域を明らかにした。

その後、在宅領域で活動する修了者に言及した文献に絞り込みを行い、研究1の質的調査で得られた修了者の活躍促進に影響する要因である「専門職としての発達」「協働的臨床判断」「社会的承認とリスク管理」「経営インセンティブ」の4つに着目し、分析を行った。先行して実施した研究1の質的研究で抽出されたカテゴリ・サブカテゴリの分析結果と比較し、新たに得られた影響要因について分析した。

また該当文献から在宅領域における修了者の具体的な活動内容を記述した箇所を抽出し、①ケア対象者の病状や病態の特徴、②修了者の実践の特徴の2点に着目して分類・整理を行い、在宅領域における修了者に求められる実践の特徴を分析した。

C. 研究結果

1. 検索結果

2025年12月末日時点で、文献検索によって和文498件、英文77件が該当した。和文は重複する2件を除外すると496件が該当した。英文は重複する17件を除外すると60件が該当した。和文・英文を合わせて566件がレビュー対象となった。これらの文献を選定基準によってスクリーニングした結果、タイトル・アブストラクト

レビューで和文は289件が除外され、207件となった。英文は33件が除外され、27件となった。その後、全文レビューを実施し、最終的に基準を満たした173件を対象とした（図1）。

文献の種類に着目すると、原著論文58件、研究報告・資料113件、総説・解説2件であった。また研究デザインに着目すると、量的研究64件、質的研究53件、事例研究・症例報告19件、実践報告36件、その他1件であった。

保有資格に着目すると、特定行為研修を修了した看護師に関する文献は34件、専門看護師に関する文献は83件、診療看護師に関する文献は56件、高度実践看護師（専門看護師・診療看護師等の表記なし）に関する文献は1件であった。

活動の場や領域に着目すると、病院での活動に関する文献が最も多く46件を占め、次いでがん・緩和ケアが21件、集中治療が16件、周術期が15件、外科系が12件、救急が11件と続いた。一方、小規模医療機関等に関連する地域・在宅領域をフィールドとした文献は9件（全体の約5.2%）にとどまった。内訳は、特定行為研修を修了した看護師に関する文献が5件、診療看護師に関する文献が4件であり、専門看護師に関する報告は認められなかった。同様に、慢性期病院・施設を対象とした文献も5件と少なく、特定行為研修を修了した看護師に関する文献が3件、診療看護師に関する文献が2件と限られた。

また特定行為研修を修了した看護師に関する文献34件のうち、活動の場や領域に着目すると、地域・在宅5件、慢性期病院・施設3件、周術期領域7件、外科系領域5件、集中治療領域5件、救急領域1件、その他病院での活動6件、領域を問わない文献3件、管理・教育などに関連する文献3件であった。

以上の結果から、高度実践的な役割を担う看護師に関する研究の多くは病院環境に集中しており、在宅領域等において修了者がどのように組織内で機能し、効果的な活動を展開しているかに焦点を当てた研究は極めて限定的であることが示された。

2. 在宅領域で活動する特定行為研修を修了した看護師に求められる実践の特徴

在宅領域で活動する修了者に関する5件の文献を示した（表1）。スコーピングレビューにおける質的内容分析の結果、在宅領域で活動する修了者に求められる実践の特徴として、以下の7つのカテゴリが抽出された。

【日常生活を阻害しない個別の文脈に沿った定期的な処置の最適化】では、修了者は、胃ろうカテーテル交換のように定期的に必要となる苦痛を伴う医行為を、単なる医療的タスクとしてではなく、療養者や家族の日常に組み込んで実施していた（文献2）。遠隔地で受診困難なケースに対しても対応する（文献5）ことが望まれており、修了者が患者・利用者の日々の生活ペースを崩さずに介入することで、個別の生活文脈に最も適した形で処置を最適化していることが示された。

【身体的・心理的苦痛を最小限に抑える処置方法の選択】では、修了者は処置に伴う侵襲に対し、安楽を最優先とするアプローチを意図的に選択していた。具体的には、対象者の微細なサインから意思を確認し、処置中に遊びを取り入れたり家族と協働したりすることで心理的安心感を醸成していた（文献2）。また、迅速なカニューレ交換による早期の苦痛緩和（文献5）や、終末期に形成される黒色部に対する保護的ケア（文献1）など、身体的・心理的負担を最小限に留める配慮がなされていた。

【医学的妥当性の担保に基づく介護者の能力と生活実態に即した代替ケアの設

計】では、家族の経済的負担や介護スキルの不足といった現実的な制限に対し、修了者は医学的に推奨・許容される安全性の境界線を見極めていた。オムツの代わりにタオルやペットシーツを活用したり、手順をシンプル化したりする（文献1）など、医学的妥当性を損なうことなく、療養者の生活実態や家族の能力に適合し、安全に継続可能な代替ケアを新たに設計し提案していた。

【尊厳保持と病状変化への対応を両立させる臨床判断】では、病状の悪化や治癒が困難な局面において、修了者は単にガイドライン上の治療を推し進めるのではなく、療養者と家族の価値観を尊重していた（文献4）。また限られた訪問時間のなかで生命維持のための処置と局所ケアの優先順位を判断し（文献1）、褥瘡を発生させずに生を全うするための予防的ケアに方針を転換する（文献1）など、治癒が見込めない場合でも現実的な妥協点を模索し、病状の推移を見極めつつ個人の尊厳を保持するための高度な臨床判断を行っていた。

【重症化を防ぎ迅速な治療的介入を導く医師との主体的な連携】では、病状悪化を察知した際に、修了者は客観的指標（DESIGN-R®等）を用いた的確なアセスメントに基づき、頻回な訪問の必要性や早期の入院調整を医師へ提案していた（文献1）。また時間的ロスが生じやすい在宅環境において医師からタイムリーな指示を引き出し（文献3）、迅速に点滴やデブリードマンを実施し（文献5）、不本意な受診や重症化を未然に防ぐ（文献4）といった主体的な連携を実践していた。

【全身状態と療養環境の総合的評価に基づく包括的なリスクマネジメント】では、修了者は、処置前にバイタルサイン等の確認による安全確保を行い（文献2）、目の前の局所症状にとどまらず、心機能などの全身状態や臓器機能との関連を深く理解した上でケアを提供していた（文献1）。さらに、室温や換気といった物理的環境の考慮や（文献1）、認知症等の家族に対する安全確保のための待機指示など多角的にアセスメントを行い（文献1）、在宅特有の制度的制限や複雑な療養背景を見据え、処置に伴うリスクを先制的に排除する包括的な安全管理を展開していた。

【多職種に対する教育的支援を伴うケアの標準化】では、修了者は自らの専門的知見やエビデンスを事業所内や地域に還元し（文献2、文献3）、地域のケアの水準向上を担っていた。また複数の訪問介護業者やデイサービスが関わるケースにおいて、写真やICTを活用した遠隔からのタイムリーな助言、図解入り手順書の作成・共有を実践していた（文献1）。これにより、どの事業所・職種が介入しても統一された質の高いケアが提供できるよう、教育的支援を通じた地域ケアの標準化を図っていた（文献1）。

D. 考察

1. 高度実践的な役割を担う看護師に関する研究の全体像

本研究は、スコーピングレビューにより高度実践的な役割を担う看護師に関する研究の全体像をマッピングし、地域・在宅領域の修了者に焦点を当てた研究が全体のわずか5件と極めて限定的であることを明らかにした。この結果は、修了者の多くが大規模病院に偏在している現状を反映しており、地域包括ケアの推進と在宅医療の充実という研修制度本来の目的に対して、在宅領域における知見の蓄積が遅れていることを示している。

2. 在宅領域における修了者の実践の特徴と役割

本レビューにより、在宅領域における修了者の実践の特徴として、【日常生活

を阻害しない個別の文脈に沿った定期的な処置の最適化】【身体的・心理的苦痛を最小限に抑える処置方法の選択】【尊厳保持と病状変化への対応を両立させる臨床判断】【重症化を防ぎ迅速な治療的介入を導く医師との主体的な連携】【全身状態と療養環境の総合的評価に基づく包括的なリスクマネジメント】【多職種に対する教育的支援を伴うケアの標準化】【医学的妥当性の担保に基づく介護者の能力と生活実態に即した代替ケアの設計】の7つのカテゴリが抽出された。この結果は、修了者が単に医師からのタスクシフトを担うだけでなく、高度な臨床推論に基づき、医学的介入を療養者の個別の生活文脈に統合する能力を有していることを示唆している。

第一に、修了者は侵襲を伴いやすい処置や治療的介入に対して、【日常生活を阻害しない個別の文脈に沿った定期的な処置の最適化】や【身体的・心理的苦痛を最小限に抑える処置方法の選択】を行っていた。医師が同席しない在宅療養環境において、対象者の表出困難な意向や苦痛を細やかにアセスメントし、日常生活を阻害せずに処置を実施することは、医学的な病態評価と療養者の生活背景の理解を統合した包括的なアセスメントに基づいていると言える。

第二に、修了者は在宅特有の資源の制約や状態の悪化に対して、【医学的妥当性の担保に基づく介護者の能力と生活実態に即した代替ケアの設計】や【尊厳保持と病状変化への対応を両立させる臨床判断】を行っていた。修了者は、医学的な許容度や安全性を評価した上で、エビデンスに基づき日用品を活用するなど、持続可能な代替ケアを提案していた。また、状態悪化時には治癒に向けた介入のみを優先するのではなく、療養者と家族の価値観や尊厳を考慮した倫理的判断を自律的に行っており、こうした実践が医学的要件と現実的な生活基盤との乖離を調整し、在宅療養の継続を支える重要な要素となっていると考える。

第三に、修了者は予防的な医療マネジメントや地域全体の質向上を目指し、【重症化を防ぎ迅速な治療的介入を導く医師との主体的な連携】や【全身状態と療養環境の総合的評価に基づく包括的なリスクマネジメント】、そして【多職種に対する教育的支援を伴うケアの標準化】を行っていた。局所症状から全身状態や療養環境のリスクを予測して先制的に介入する実践は、高度な臨床推論能力に基づいている。また、客観的指標を用いた医師への報告は、円滑な意思決定の協働を促進し、迅速な指示獲得とタイムリーな介入を可能にすることで、不本意な救急受診や入院の回避に寄与していると考えられた。さらに、ICTの活用や手順書の共有を通じて多職種へ専門的知見を還元し、地域ケアの標準化を図る活動は、地域全体の医療・ケアの質向上に貢献していると考える。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究にはいくつかの限界が存在する。第一に、在宅領域における修了者に焦点を当てた対象文献が5件と極めて少数であったため、抽出された実践の特徴を一般化するには限界がある。第二に、これら少数の報告は、すでに特定行為の実践に積極的な組織や、比較的良好な多職種連携が構築されている地域からの発信に偏っている可能性が否定できず、活用が進んでいない組織が抱える潜在的な障壁や現場での葛藤を十分に抽出できていない可能性がある。

E. 結論

本スコーピングレビューにより、高度実践的な役割を担う看護師に関する日本の研究は急性期病院などの大規模施設に

集中しており、小規模医療機関等や在宅領域で活動する修了者に焦点を当てた実証研究は全173件中5件と極めて限定的であることが明らかになった。

本研究の結果は、小規模医療機関等において修了者の更なる活躍を推進するための提言やガイドを作成する上で、重要な基礎的知見となる。今後は、本レビューで特定された組織的支援体制に関する研究の欠如というギャップを埋めるため、修了者の活動を促進および阻害する要因について、訪問看護ステーションの管理者の視点等も含めたインタビュー調査を実施し、より具体的かつ実践的な体制づくりの方策を解明していく必要がある。

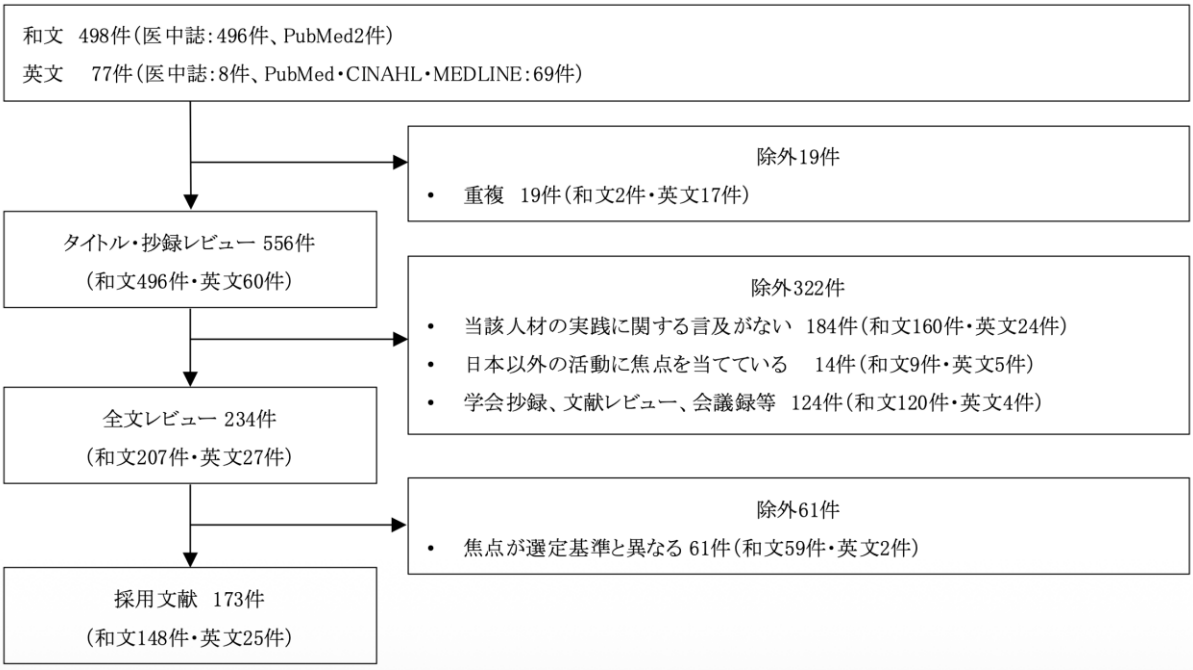


図1　文献の選定プロセス

表1　在宅領域で活動する特定行為研修を修了した看護師に関する文献

No.	タイトル	著者	雑誌名	研究デザイン
1	訪問看護ステーションにおける医療的ケア児への特定行為―特定行為研修修了看護師による胃ろうカテーテル交換の取り組み―	小野勝美，並木知佳	訪問看護と介護	実践報告
2	へき地診療所における特定行為研修修了看護師の活動に対する期待	村上礼子ほか	自治医科大学看護学ジャーナル	量的研究
3	特定行為研修制度に対する訪問看護師の認識―訪問看護ステーションへの全国調査から―	富田真佐子ほか	日本看護科学会誌	量的研究
4	Practices and Challenges of Home Care Pressure Ulcer Management: Perception of Home-visit Nurses Who Have Completed the Specified Medical Acts Training	Yamashita Rurikoほか	The Journal of Medical Investigation	質的研究
5	在宅における特定行為およびその導入に対する訪問看護師の認識―訪問看護師へのインタビュー調査―	佐藤千津代ほか	日本地域看護学会誌	質的研究